

親鸞さまの

【本文】

劫こうじやく 濁じやくのときうつるには

有うじよう 情じようやうやく身しん小しょうなり

五濁ごじやく 悪あく 邪じゃまざるゆゑ

毒どく 蛇じゃ 悪あく 竜りゆうのごとくなり

【意識】

時代は移り変わって、人も世も混迷を深めております。

人は自らの手で、自らの命を縮めるような行いを重ねて、

仏さまに成る方向とは、逆の歩みを良しとする考え方、行いが世を覆っています。

その人々の姿は、まるで毒蛇や悪竜のようである、と中国の高僧・善導大師は仰つています。

【私の味わい】

「井の中のかわず 蛙 大海を知らず」「『莊子』ということわざには続きがあります。それは、「夏の虫氷を笑う」です。夏の虫、つまりせみは夏に生まれて夏に命を終えます。このため他の季節を知りません。誰かが「せみ君、冬という季節があつてね、あの池の水が固まつて氷というものになるんだよ」と教えます。しかし、せみはこれを全く一顧だにせず笑うのです。「そんなことがあるものか。私は信じないよ」と。狭い自説に囚われて、見聞を広めず世間を狭くする人の危うさを言い得て妙のことわざです。

今の世の中では、「お浄土、そんなものがあるか」と言う人(内心思っている人も)が大半だろうと思います。しかし、そんな言葉に出会う時、いつも私が思うことはそのご当人が必ず「私はこう考える」「私は信じない」という範囲を出ていないという事です。つまり、ご本尊阿弥陀様がお浄土がある、そのお浄土へ連れてゆこう、まかせなさいと仰つているのにも関わらず、そのご本尊を見下ろして「いや、私は・・・」と誇らしげに自説を開かい 陳ちんして何も疑問をお感じにならないのだろうか、という事なのです。

「赤ちゃんが泣く声がうるさい」と私は思うので、静かにしてください」ということを言う人がいると聞きました。「私が」「私は」の行き過ぎた病は、この世間を生きにくくしています。他人より先ず私を主張する、その考えに慣れきっているのかもかもしれません。そして、何よりご本尊様のお心を見えなくしているのも、その私が原因です。

「本尊の仰せを、ただ素直に聞いて信ずる。」「私」に用はありません。(悠水)